

日高正好君を偲んで

——その著書と幾つかの思い出——

宮 地 國 敬

願望として、自分の死ぬ時期を「願はくば 花のしたにて 春死なん そのきさらぎの 望月の頃」と歌に詠み、そして、本当に桜花が咲き乱れている季節の満月の夜に、七十三年の生涯を閉じたと伝えられる西行のような幸運な事例は別にして、普通の場合、人間は、死に時と死に方についての願望を抱くことはできても、実際に自分が息絶える時の死に方と、いつ死ぬかの時期はわからないのである。それゆえに、私たちは自分の生命がまだまだ当分は続くものと考え、平気な顔をして毎日を過ごしている。

日高正好君が、今年（97年）の5月14日に五十六歳で他界した時、私は、彼がこの数年辛い闘病生活を続けていたことを十分承知していながらも、まだ若いのに、と思ったものであった。彼が、「僕がもうすぐ四十五になる／もう十分に生きたと言ったら」（『アメリカ詩集』）と書き記していても、あるいは本当に「もう十分に生きた」と思って生きていたのだとしても、現代の世間一般の認識では、五十代の半ばは、人生でもっとも充実した働き盛りの年代であるのだから、まだ若いのに、私は心底から思ったのである。

世間ではよく、善い人ほど早死にすると言う。しかし、それが真実であるのかどうか、私は知らない。ただ、その人の人生が短ければ短いほど、人の恨みや憎しみを買うような機会は少なくなるので、それだけ人から惜しまれるのであろうと思われる。だが、早死というのは、その人が持っていた可能性を十分開花できないまま終わらせてしまうのであるから、早く死んで惜しまれるよりも、生き延びている方が良く、私は信じている。

しかし、だからと言って、いつまでも長生きすれば良いのかと言えば、それがそうでないから厄介なのである。九十一歳で死んだサマセット・モームも、六十歳の頃には、「生きていることが正に苦痛と不幸そのものでしかない時に、人が自らの意志で自分の生命を絶つことを、わたしは認めざるを得ない」と言って自殺を肯定し、また安楽死についても強い関心を示していたのに、彼の甥のロビン・モームによれば、彼は年老いてから長寿への願望がますます強くなり、そのためには遠い外国へ出掛けることもためらわなかったというし、また晩年には「おれの人生は失敗だった」「おれは救いようのない馬鹿だった」と、人目をはばからず泣きわめき、取り乱していたということであるが、人間の観察者としてあれほど冷徹かつ明敏であった大作家にしてそうであるとすれば、人間の生き死にというのは、やはりちっぽけな人間の思惑を越えたものという認識を強くするのである。そして、そのように考えてくると、私も日高君の〈早死に〉をそのまま受け入れざるを得ないと思うのである。

私が日高君を知ったのは1963年のことである。当時私は本学文学部英文科の助手で、恩師山本修二先生の発議で設立することになった立命館大学英米文学会の発足に向けて、いろいろと準備

作業をしていた。中でも卒業生や在學生を組織する仕事は、かなりの時間や労力を必要とした。そのような手間のかかる作業を、院生は言うまでもないが、専攻の共同研究室に出入りしていた学生の有志たちも積極的に手伝ってくれていた。日高君はその一人であった。

やがて日高君が四回生になり卒業後の進路のことを考え始めた時に、私は彼に大学院への進学を強く奨めた。助手の私に何の目算もある訳はないが、只々、優秀で熱意のある学生には是非大学院へ進学してほしいと、私は心から願っていた。そして、そうした私の勧奨に彼は応じてくれたのだ。このようにして私と日高君とは〈出会った〉のである。

またその頃、こんなことがあった。日高君が大学院修士課程を終了する直前、旅行先の静岡県のある都市で交通事故に遭った時、その知らせを受けると、私は取るものも取りあえず、貰ったばかりの給料袋を懐に入れて、現地へ飛んで行った。私と折角〈出会った〉若者を死なせてはならないという祈りのような思いが、私の胸中に強く存在していたからである。

そのようなことで、友人として日高君と交際した期間は三十五年にもなるから、決して短くはないが、しかし、このように麗々しく日高君を偲ぶ文章を書くというのは、少々面映い感じがしないでもない。その理由として、私が彼の師ではないということは当然として、その他に、私と日高君とがこの間常に一緒に歩いて来たのではないということがあげられるだろう。

私は、自分が極めて弱い人間であり、能力にも乏しいことを十分に自覚しているので、何かにつけ、事を行おうとする場合、常に身近に協力者を求め、集団を作り、力を合わせて、眼前の障害や困難を乗り越え、目的なり計画なりを達成するように心掛けてきた。しかし、日高君は強い人であったから、自己の信念やあるいは計画に従って、いつでも一匹狼的に独立して行動できたので、その分、私との間には距離があった。私自身は現在でも、日高君のことはごく僅かなことしか知らないという思いを抱いている。

このような疎遠になって行った始まりは、1979年に私が衣笠英米文学懇話会（現在の衣笠英米文学会）を発足させたことにあったようである。衣笠英米文学懇話会は、前述の立命館大学英米文学会が大学紛争の煽りを受けて、72年に解散したあと、数年の間沈黙を余儀なくされていた卒業生たちの強い要請を受け、また同じく恩師の石田幸太郎先生の鞭撻もあって発足させたものであった。この懇話会の第一回研究発表会の案内状に、私は次のように書いている。

「ところで、立命館大学英米文学会がやむなく解散いたしました後も、機会ある毎に、多くの方々から学会再建の希望が寄せられておりました。その間にはいろいろな経緯もございましたが、それらはさて置き、私共は学会再建への一つの足掛かりとして、この研究発表会を始めることにいたしました。私共は、このようなささやかな研究会活動を地道に積み重ねていくことで、何時の日にか、英米文学専攻教室のご理解とご協力を得て、この懇話会が「立命館大学英米文学会」へと発展し成長していくことを、心からお願いいたします。」

しかしこの願いは不幸にして実現しなかったし、この時、「自分の研究計画もあり、独りで勉強したいから」という理由で、日高君も参加してくれなかった。従ってその頃から、私たちの間で共通の話題が次第に少なくなっていったのも、自然の成り行きであった。但し、日高君は着実に研究を重ね、その成果を83年に『ドライサー短編集 人と作品』として出版した。衣笠英米文学会の友人たちは、彼の精進努力を多とし、日高君夫妻を招待して、ささやかながらも出版記念会を催し、これを祝ったのである。

出版記念の祝賀会と言えば、日高君が91年に『父のコンパス』を出版したので、日高君夫妻を拙宅に招き、私たち夫婦と四人だけで、お祝いの会食をしたことがあった。この本はその標題からも推測できるように、おそらくその年の2月に逝去されたご尊父に捧げられたものだと私は思うのであるが、日高君はこの本の内扉の見返しに、私への献辞を書いてくれていたのである。彼に対して私は何も言わなかったけれども、おそらくさまざまな思いを込めてこの献辞を書いたのであろうと、彼の心中を推し量ったものであった。私はその年度で立命館大学を定年退職することになっていた。それで、これは一つには同僚としての私への、別れの挨拶の意味もあったのかもしれないが、私は、非常に思い上がった推測であることを重々承知の上で言えば、長い間私たちは疎遠であったけれども、それにもかかわらず、彼が私を、ある意味で父親的存在として見ていたのではないかと受け止めたのである。

『アメリカ詩集』に次ぐ彼の第二詩集である『父のコンパス』は、その副標題に「日高正好詩集」とあるように、大半の頁は彼の詩で占められている。それに七つの短い文章が「編集後記」として付けられていて、これらの文章のあるものは、なかなか味があって無視しがたい。従って、もう少し随筆の部分を増やして、詩文集の形にすれば良かったのにと思うのだが、これは、日高君が編集工房ノア社長の涸沢純平氏と二人で、88年ごろから発行しだした同人雑誌「モモとバク」に掲載した詩や文章を、そのまま集めたからではないかと思われる。しかし、私はこの「モモとバク」を全く見ていないので、あるいは間違っているかもしれない。

このあと、日高君は94年に四冊目の著書『私記 三好達治』を出版している。この本は、彼が傾倒していた詩人三好達治の生い立ちを、幼少期から青年期に至る家庭の状況や生活環境などを、作品や文献からだけではなく、三好に関わりのある土地を訪れ、関係者から直接話を聞くなどの調査を行なって、三好がどうして詩人になっていったのか、その要因を解明した労作である。勿論日高君は三好を語りながら自己を語っている。三好の人格形成過程と自己のそれとの間にかなりの類似性を見出したので、三好に惹かれ、この本を書いたのだと彼は述べている。そのような思い入れがあるゆえに、彼の文章には血が通っている。そして私は、この本はこれから三好達治に関心を持つ人々の間で読まれる、一つの資料になるであろうと信じている。

この本が私の許に送られてきた時、「りんどうの紫に秋を実感しています。いつもご無沙汰ばかりで申し訳ありません。病気になる前に書いていたものが本になりました。御笑納下さい。三好の三高時代を語るにあたって先生はじめ、山本、石田両先生の思い出を書かせていただきました。一所懸命に書きましたが、不十分な点が多々ある事を怖れています」という手紙が添えられてあったが、彼は、私が立命館を去ってから間もなく発病した。

私は子供の頃から肺結核で、殊に戦後の学生時代にも長い療養生活を過ごしており、健康な人が見舞いに来ると、病気のわが身が辛くなって、随分神経に耐えた経験を持っている。それで、病人のお見舞いには、集団での見舞いに参加する以外は、本人から強く求められない限り、行かないことにしている。また病状についても、こちらからは尋ねないようにしている。医学的知識を持たない人間、それも他人が、入院し手術を必要とするような病者の病状を、親切気に心配そうな顔をして、あれこれ聞いても仕方がないと思っているからである。従って、日高君の病気についても、私は殆ど何も知らない。ただ、92年9月に、彼の極めて親しい友人たちと一緒に四人で、数日後に本格的な再手術を控えて、京都市民病院に入院していた彼を見舞っている。それ以後、

伝聞によれば、彼はさらに何度か手術をしたそうであるが、私は見舞いに行かなかった。

前記の手紙の末尾に、「先生には、新しい職場でご多用のご様子ですが、時間をつくって奥様と亀岡の田舎にもお運び下さいますよう。バラを咲かせてお待ち申し上げます」とまで書いてくれていたのに、そして亀岡の以前の家へは、家内を伴って何度か訪れたこともあったのに、今度の家には私は足が向かなかった。だから、彼の家に出掛けたのは、彼と最後の別れをした時であった。

生前の日高君と最後に逢ったのは、96年12月のある出版記念会の席であった。彼にも案内状を出してはあったが、発病後は、このような会合には絶えて出席したことがなかったので、実は出席を期待していなかった。それが、全く思いがけなく、彼が姿を見せたのである。数年振りに見る彼の容貌はすっかり変わってしまっていて、私は強いショックを受けた。私は彼と話をしなかった。いや出来なかった。何をどう話したらよいかわからなかったからである。だから、彼の席まで出掛けて行かなかった。しかし、宴の半ばで彼が席を立った時、私はただ黙って、彼と眼をじっと見合わせ、固い固い握手をして別れた。彼も何も言わなかった。しかし、彼が私たちとの最後の別れをしに来たのだということは、私にはわかっていた。辛かった。彼にとってはもっと辛いひと時であったことであろう。私が彼であったら、あのような席に出ては来なかったであろう。彼はやはり強い人間だと、その時、私は改めて思ったものであった。

日高君はあまり酒が強くなかったのに、強がって呑み、そしてよく乱れた。その様子は正に、彼が『私記 三好達治』の中で記述している、若き日の三好と梶井基次郎との湯ヶ島での交遊の模様や、梶井が宇治の猿狩りの折に見せた行状とよく似ていた。彼がなぜそれほど酒に溺れたのか、私にはわからない。三好や梶井と同じように、彼もまたそのようにせずにはいられないようなものを、心の中に抱え込んでいたのであろう。ただそのために、家族や同僚、友人たちには随分苦労や迷惑、心配をかけた。私がいるところで乱れることは殆どなかったのだが、私は彼の武勇伝を聞くたびに、自分自身がかなり放埒な人間であるにもかかわらず、まるで放蕩息子の行状を聞かされる肉親のような気持ちになったものであった。

直情径行の彼は、アルコールが入らないときには、持って生まれた竹を割ったような性格から、曲がったことが大嫌いで、高圧的に出てくる権力者や相手に対しては、常に反抗し対抗する姿勢を示し続けた。教育の現場でも、彼は学生に対していつも真剣であり、誠実であったという。私はそのことを彼の教えを受けた複数の学生たちから聞いている。

またある時、「日高先生のような教育者になりたかったので、僕は教員になったのです」という手紙を、現在兵庫県で高校の教師をしている方からいただいたことがあった。日高君自身も中学生の時に西浦弘先生という方に出会い、その方の影響を強く受けたので、中学卒業後、働きながら勉学に励み、教員になったのだと語っている。立命館の教室で日高君と〈出会った〉ために、自分の進路をはっきりと定めた人がいると知って、私はとても嬉しかった。おそらく彼の教え子の中には、「日高先生と出会ったから」と言う人が、他にも大勢いることであろう。日高君が常に教育に情熱を傾け、血をたぎらせる型の教育者であったから、私には、そのような人々の存在を、十二分に信じられるのである。

そして日高君は、そのような人々や、家族や同僚、友人たちの記憶の中に、これから生き続けることであろう。合掌